

2013年度から東京藝術大学社会連携センターで開講している「社会基盤としての芸術」では、各界の第一人者を招き、芸術マネジメント技術や、社会参加・貢献へのビジョン、または成功論等、実学としての芸術について知ることのできる機会を学生に提供してきた。従来、芸術もしくはその前提条件としての文化は社会の限定された層でのみの価値でしか問われることはなく、その領域における表現や活動も社会を構成する基盤としてではなく、その前提条件を満たした上での余剰的なものとして受け止められてきた。しかし、「社会基盤としての芸術」においては、芸術文化という領域そしてその表現や活動を、社会の第一義的な構成要素とみなし、人間社会を支える基盤の一つとしてとらえ直すことによって、芸術文化に対する根本的な視点の転回を試みている。前期・後期それぞれ全15回の講義をそれぞれ3ブロックに分け、社会を構成する五つの領域それぞれにおける芸術文化の役割とそこから生み出される感性と知識、経験の社会的重要性を説いていった。講義形式とそれぞれのブロックにおいて現実に指導的な立場でマネジメントにあたる講師を招聘することで、現実社会の動向とリンクする実学としての芸術マネジメント技術の習得と藝大生が身につけている技術と知識を用いた社会参加、貢献へのビジョンを具体的に示唆した。今年度は、前期には「〇〇的人生のつくり方」、後期には「藝術的未來のつくり方」というテーマを掲げ、各界から計30名の講師を招いた。

前期は、本木克英(映画監督)、隈研吾(建築家)、坂井直樹(コンセプター/ウォーターデザイン代表取締役)、猪子寿之(チームラボ代表)、大塚敦(NHK国際局国際企画部副部長)、館鼻則孝(アーティスト)、中村信喬(博多人形師)、大西一平(ラグビーコーチ、OVAL HEART JAPAN代表理事)、廣瀬禎彦(元コロムビアミュージックエンタテインメントCEO)、千住明(作曲家)、福岡伸一(生物学者)、鈴木喬(カメラマン)、森雅史(富山市長)という13名(敬称略)の講師に、「〇〇的人生のつくり方」のテーマに沿って、若かりし頃から(講師によってはその生い立ちから)、現在に至るまでの半生

について語りながら、社会参加、貢献について示唆していただいた。

また、2015年7月5日には、これからの日本における社会的課題について藝大生の問題意識を高めるため、特別講義として、社会における女性参画を塾方式で具体的に支援されている非営利団体『UZUの学校』の校長である安倍昭恵（内閣総理大臣夫人）と副校長の小川和也（デジタルマーケティングディレクター）を講師として招きシミュレーション講座を行った。日本における最も大きな社会的課題の一つである男性中心主義の価値観からの脱却、世界的に見ても多くの女性が活躍している芸術文化の分野での女性の積極的な社会参画の実現について、テーマ討議とシンポジウムを行った。

後期は、今泉今右衛門（陶芸家）、大樋年雄（陶芸家）、渡辺捷昭（トヨタ自動車株式会社社相談役）、谷川史郎（株式会社野村総合研究所理事長）、近藤誠一（株式会社パソナグループ社外取締役）、橋本夕紀夫（デザイナー）、大林剛郎（株式会社大林組会長）、緒方慎一（クリエイティブディレクター／SIMPLICITY代表）、中谷日出（アートディレクター／日本放送協会解説委員）、西高辻信宏（太宰府天満宮権宮司）、東京コスモ（岡田拓也・北村翔平／映像作家）、ニコライ・バグマン（フラワーアーティスト）、石井岳龍（映画監督）、井上涼（アーティスト）という14組15名（敬称略）の講師に、「藝術的未來のつくり方」のテーマに沿って、これからの芸術の可能性について示唆していただいた。また、2016年2月10日には補講として「大林組本社アート・プロジェクト」の見学を行い、企業とアートの関わりについて学生が体験する貴重な機会となった。



廣瀬禎彦氏による講義



千住明客員教授による講義